

雲岡石窟における中小窟龕の研究

A study on small caves and niches in the Yungang Grottoes

熊坂聡美
KUMASAKA Satomi

1. はじめに

雲岡石窟（中国山西省大同市）は460～525年頃に造営された250を超える石窟群によって構成されている¹。そこには北魏皇室によって造営された大型石窟群と、それ以外の人々によって個別に発願された中小の石窟あるいは仏龕が存在する。本研究が研究対象とするのは後者である。それらを国家主導の大規模な造像活動あるいはその計画に基づき制作された造像と区別するために仮に「民間造像」と呼ぶ。雲岡石窟の民間造像は数量こそ多いものの規模が小さいために、これまで十分に研究されてこなかった。しかし雲岡石窟の全体像を正確に把握するには、民間造像も含めた理解が不可欠である。

本論の主要な論点は、①制作開始時期の特定、②同時期に国家主導で造営された石窟との関係の解明、③洛陽遷都（494年）によって造像活動の担い手が民間に移行した後、実際に窟龕の制作をおこなった工人集団が複数の系統に分かれていた可能性の検討の3点に集約される。それらの検討を通して、国家的石窟と民間造像とがどのように関わり合いながら雲岡石窟が形づくられていったのかを明らかにし、雲岡石窟の再評価へと繋げることを目指す。

2. 雲岡石窟における民間造像の出現（第2章）

第2章は雲岡石窟における民間造像制作がいつ、どのように始まり、国家的な造像活動とどのような関係を持っていたのかを明らかにすることを目的とする。雲岡石窟で最初に造営された曇曜五窟（第20、19、18、17、16窟）では、窟内空間の大部分を石窟本尊や脇侍などの基本造像が占め、周壁には大きさも制作時期も多様な仏龕が刻まれている。その中でも比較的早期に属する仏龕の制作時期については諸説ある²。そこで本章では仏龕の中に含まれている石窟開鑿期の作例を抽出するため、各窟の当初計画に含まれていた基本造像（石窟本尊、脇侍、壁面上層の千仏など）と仏龕との間の①切り合い関係、②造

像の様式および形式的特徴に注目した。結果、第一に曇曜五窟開鑿期の作例と見なすことのできる仏龕は合計51基あり、各窟開鑿期の仏龕は周壁莊嚴の作業と並行して制作が始められていること、第二に仏龕制作は西の第20窟で始まり、次第に東の石窟へと広がったこと、第三に供養者像を伴う仏龕の配置には当初規則性を認めることができなかったが、次第に複数の仏龕を左右対称や何らかの意図をもって配置する段階へと移行したこと、そして第18窟はその過渡期的状況を示していることが理解された。全体を総合すると、雲岡石窟の民間造像制作は、開始当初は石窟全体の造営計画とはほぼ無関係で、個人的な造像活動であったが、次第に集団化し石窟を構成する要素として取り込まれていった。複数の仏龕を一定の規則に基づき配置するという、壁面を装飾する意識の出現は、その後第7・8窟などで見られるような周壁全体を同大の仏龕で覆う整然とした構成に至る前段階として位置づけることができると結論づけた。



図1 雲岡石窟第19窟仏龕〔3〕と周囲の千仏（筆者撮影）
仏龕の区画と千仏の間には不自然な空白があり、少なくとも隣接する千仏よりも先に仏龕〔3〕が制作されていたことは明らかである。

3. 第5窟と民間造像（第3章）

第3章は、造像の着衣形式の漢化という大きな転換を果たした第5・6窟（国家主導の対窟）のうち、第6窟ではなく第5窟の形式が同時期の民間造像に受容された背景を明らかにすることを目的とする。

本章前半では、現在諸説ある第5窟の造像制作開始年代³と石窟の造成事情を、様式・形式的特徴の分析、そして大規模な亀裂と造像の関係に基づき検討した。その結果、①明窓・門口の造像が制作された年代は、造像の服制の新・旧を問わず480年以降であること、②開鑿初期に発生した亀裂が窟内の造像制作に対して一定の影響を与えていたこと、そして③西壁の方が東壁に先行して完成していたことの3点を示した。

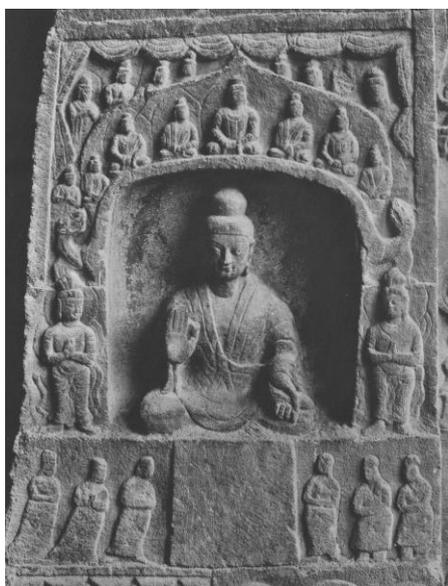


図2 第16窟明窓東下層北龕（漢化過渡期の仏龕）
（水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』第11巻図版53）

本章後半では第5窟と、第6窟および第11、13窟との関係、そして同時期からその後の民間造像との関係をそれぞれ分析した。その結果、まず第5窟では造像制作の進行に従い、第6窟と共通する要素が増えていくことが確認された。他方、第11、13窟（窟内諸龕は民間造像）と共通する装飾は第5窟造像制作の最初期に僅かに取り入れられていたに過ぎないことも理解された。ただし国家的石窟と民間造像との関係を考えたとき、第6窟よりも第5窟の方が民間造像との接点が多いという事実は重要である。また、造像様式の面でも第5窟像には第6窟像と比べ、身体表現などに先進的な特徴が多く認められる。つまり民間造像との間により多くの接点を持ち、新し

い造像様式への転換を一層進展させていたことが、第5窟像の形式が漢化過渡期の民間造像に対してより強い影響を与える要因となったと考えられる。なお、漢化過渡期の民間造像（図2）は第11、13窟内部だけでなく曇曜五窟周辺にも分布し、それらは全体で様式・形式的特徴を同じくする。離れた位置に刻出されていても全体で造像の情報を深く共有しており、一つの造像グループを形成していることが理解された。

4. 第11・12・13窟外壁窟龕（第4章）

第4章は洛陽遷都前からその後にかけて雲岡石窟の広い地区で制作された民間造像が、どのようなまとまりを持ち、どのように関わり合いながら展開したのかを明らかにすることを目的とする。そのために、先行研究⁴によって概要が明らかにされている第11・12・13窟外壁の窟龕を中心に据え、第5・6窟周辺の窟龕、そして第21窟以西の西端地区の窟龕との関係を窟・龕の構成ごとに比較分析した。

結果を総合すると、第一に第11・12・13窟外壁と第5・6窟周辺の窟龕の間では500年頃から情報の交流が活発に行なわれており、共有された情報の多さから見て、2地区の窟龕は「東部地区」として一つのグループを成すと言って良く、その中心は第11・12・13窟外壁であった。他方、第11・12・13窟外壁と西端地区の窟龕の間には当初隔たりがあり、共有される造形や形式が増加したのは三壁三窟の出現以降（507年頃）であった。ただし東部地区で出現した新しい形式の窟龕が西端諸窟で流行することはなく、西端諸窟の新しい形式が東部地区に取り込まれることの方が多かった。そしてその傾向は東部地区で三壁一壇二窟窟の出現した時期（507年以降515年以前）にさら

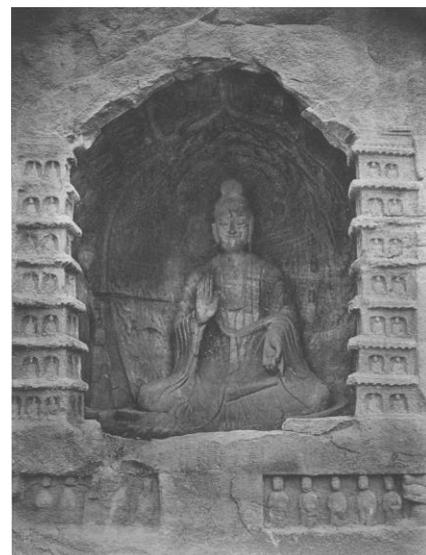


図3 第12-1窟（500年、水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』第10巻図版98）

に強まった。つまりその頃には造像活動の中心が西端諸窟へと移行したと考えられる。

東部地区と西端諸窟の小型窟の間には情報交流が全くなかったわけではないが、それぞれに連続的な変化があり、異なる系譜関係が成立することから、東・西の地区の工人集団は基本的に相違していたと考えられる。なお、東部地区では第12-1窟(500年、図3)を中心とする500年前後の龕に、それまでの雲岡石窟には見られなかった新しい文様が複数採用されていることから、この時期の東部地区の民間造像が他地域の造像から最新の情報を受容していたことも考えられる。また、雲岡石窟における「三壁三龕窟」や「三壁一壇二龕窟」など新しい窟形式の出現はいずれも龍門石窟よりは早期であることも理解された。

5. 中小窟の造営思想—尊像配置の定型化(第5章)

第5章では、洛陽遷都後になると民間造像の多様化が進み、仏龕だけでなく小規模ながらも四壁を伴う石窟が造られるようになったことに注目し、空間を構成する図像がどのような意図で選択、配置されたのかを明らかにすることを目的とした。そのために最も数の多い中・小の「三壁三龕窟」における尊像の配置法に注目した。

検討の結果、同じ三壁三龕窟であっても、中型窟と小型窟とでは尊像配置の規則が基本的に相違することが明らかとなった。中型窟では左・右壁の尊像の対称ないし造形的照応、そして窟ごとの独自性が強く意識されているのに対し、小型三壁三龕窟には尊像の配置法に一定の規則が存在する。特に菩薩交脚像を左壁に配置する点は(図4)、小型三壁三龕窟よりも早期に造られていた「三尊構成」の小型窟窟(第13窟外壁で出現)においてすでに定着している点が重要である。対する右壁には如来倚坐像のほか、千仏や儒童布髪本生など過去仏とみなされる図像が

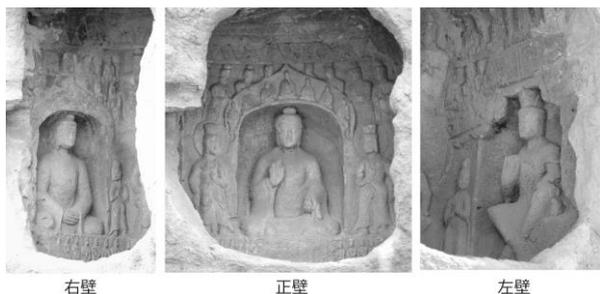


図4 小型三壁三龕窟、第5-40窟(520年、筆者撮影)

選択的に配置されている。これらのことから、小型窟に配された三仏は、過去・現在・未来の三世仏を表したものであると考えられる。なお、三世仏表現に菩薩交脚像を取り入れることによって、過去仏から釈迦仏、そして弥勒へという継承関係が明確に表現されることになった。それは釈迦から弥勒へという系譜関係を特に重んじた雲岡石窟特有の造形的伝統に基づく表現であること、そしてそのような配置法の淵源は第6窟中心柱四面の尊像配置や北涼塔などに求められる可能性があることを指摘した。

6. 天蓋龕からみた民間造像の工人系統(第6章)

第6章は天蓋龕という特殊な仏龕形式に注目し、その造形的特徴の相違と分布状況などを総合して工人系統の一端を明らかにすること目的とする。分類

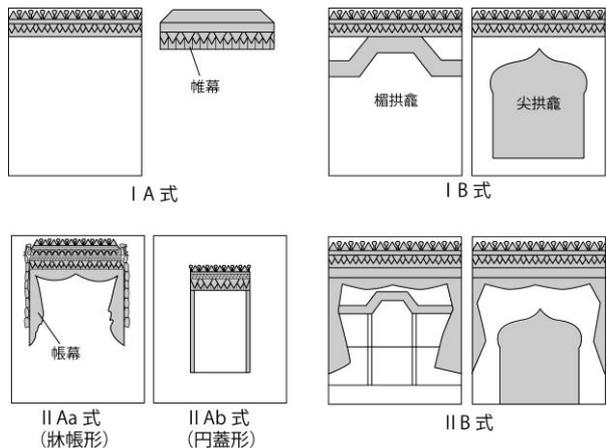


図5 天蓋龕の分類(筆者作成)

の結果、雲岡石窟の天蓋龕は最末期まで複数の形式が併存することが明らかとなった。そしてそれは保守的な性格の強いグループと、他地域からの情報を受容したグループとに分けることができる。前者は従来から定着していた尖拱龕や楣拱龕と天蓋とを組み合わせた形式であり(IB・IIB式)、複雑化しながら最末期まで継続した。後者は牀帳や円蓋といった宮殿や寺院などの具体的な設えと結びついた天蓋龕のグループである(IIAa・IIAb式)。他地域では、牀帳形天蓋龕(IIAa)は洛陽周辺で認められるのに対し、円蓋形天蓋龕(IIAb)は、雲岡石窟における出現よりも早期から南朝領域の四川省出土造像群において定着していたことが明らかとなった。世俗の最高権力者の玉座を彷彿とさせる華やかに装飾された牀帳の造形が⁵⁾、仏龕装飾の一形式として定型化したことによって、漢化という仏教美術の大きな転換が仏龕という仏の居所の造形にまで及んだことが理解

された。

7. おわりに

以上、雲岡石窟における民間造像の諸相を出現から最末期まで概観した。その過程では民間造像の独自性や、国家的石窟造像（国家主導で造営された大規模石窟とその造像）との関係の変化が看取された。

まず、雲岡石窟における民間造像は、国家的石窟に付随して出現したが（第2章）、造像の漢化前後には国家的石窟造像と民間造像との間には一定の隔たりが認められた（第3章）。それは、漢化過渡期の民間造像が単純に国家的石窟である第5・6窟造像を新しい着衣形式ごと模倣するのではなく、第11、13窟内諸龕（民間造像）の装飾形式を基礎としながら、着衣の細部表現のみを第5窟式とするという選択的な受容の態度として表れていた。つまりこの時国家的石窟と民間造像の造像活動を担った工人集団は、基本的に相違していたと考えられる。

同時期から次第に民間造像は多様化する。従来のように既存の石窟内部に「仏龕」を刻出するばかりでなく、造像活動の場は石窟の外壁にも広がり、小規模ながら「石窟」が造られるなど内容も次第に変化していく。そのような中で制作された第11・12・13窟外壁あるいは第5・6窟周辺といった東部地区の窟龕と、第21窟以西の西端地区の窟龕との間には、造形的淵源の相違だけでなく、（時に影響を与え合いながらも）異なる過程を経た展開が観察される。このことは、民間の造像活動の範囲や内容の広がりと共に、制作をおこなった工人にも複数のグループが現われた可能性が高いことを示す（第4章）。また、民間主導の石窟造営において、左・右壁の造形的対応関係を重んじたグループ（中型三壁三龕窟、第21窟以西に分布）と、新しい三世仏表現を確立したグループ（小型三壁三龕窟ほか小型窟龕、出現は第13窟外壁）が出現し、両者が異なる淵源を持つことも（第5章）、系統の異なる窟龕の存在を示しており、概ね東・西地区間の窟龕の区別を裏付けるものと言える。

加えて遷都後10年以上が経過すると、南朝や洛陽地域の情報を積極的に取り込んだ新しい形式の天蓋龕を採用する小型窟のグループが西端地区に現われる（第6章）。それ以前に雲岡石窟で採用されていたのは、ほとんどが従来からある尖拱龕や楣拱龕の上方を天蓋で装飾する形式であった。天蓋龕では大きく分けてこれら2系統の形式が最末期まで併存する。

総合すると、遷都前後以降に制作された民間造像は次のような4つのグループに分けることができる。

- ①第11、13窟の仏龕を起点とし、曇曜五窟追刻およびその周辺の石窟に拡大したグループ。
- ②第11・12・13窟外壁、第5・6窟外壁の窟龕を起点とし、新しい三世仏表現を確立したグループ。
- ③西端地区中型三壁三龕窟のグループ。
- ④牀帳形・円蓋形天蓋を採用する小型三壁三龕窟のグループ。

そのうち、旧来の石窟造像の形式を踏襲するなど保守的な傾向が特に強いのは①と③である。逆に②は次第に新しい要素の割合を増やしたグループ、④は②で出現した尊像配置の規則を踏襲しながら、装飾面では完全に新しい形式を採用する。515年前後にはこれらのグループが影響を与え合いながら、最末期まで活発な造像活動が展開されていたことが理解された。

以上の結果を踏まえ、さらに雲岡石窟が他地域造像に対して与えた影響を考察することは今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 水野清一・長廣敏雄：雲岡石窟、第1～16巻、京都大学人文科学研究所、1951～1956年。
- 2) 水野清一・長廣敏雄：雲岡石窟、第12巻本文、京都大学人文科学研究所、p.34、1954年。
杭侃：雲岡第20窟西壁坍塌の時間と曇曜五窟最初の布局設計、文物、1994年第10期。
石松日奈子：雲岡中期石窟新論—沙門統曇曜の失脚と胡服供養者像の出現—、MUSEUM（東京国立博物館研究誌）、587号、2003年。
- 3) 水野清一・長廣敏雄：雲岡石窟、第2、16巻本文、京都大学人文科学研究所、1955、1956年。
宿白：雲岡石窟分期試論、考古学報、1978年第1期。
吉村怜：雲岡石窟編年論—宿白・長廣学説批判—、国華、第1140号、朝日新聞社、1990年。
八木春生：雲岡石窟第5および6窟についての一考察、雲岡石窟文様論、法藏館、2000年（初出は1995年）。
曾布川寛：雲岡石窟再考、東方学報、第83冊、京都大学人文科学研究所、2008年。
岡村秀典：雲岡石窟編年論、雲岡石窟 第17巻 第1窟—第6窟、科学出版社東京、2017年。
杭侃：雲岡第5窟争議、石窟寺研究、第8輯、科学出版社、2018年。
- 4) 水野清一・長廣敏雄：雲岡石窟、第10巻、京都大学人文科学研究所、1953年。
宿白：平城における国力の集中と〈雲岡様式〉の形成と発展、雲岡石窟文物保管所編 中国石窟 雲岡石窟、第1巻、平凡社、1989年。
- 5) 小杉一雄『中国仏教美術史の研究』（新樹社、1980年）。